

## 現代アメリカ文学における

### 現実的なものと永遠的なもの

上野直蔵

現在アメリカ人の日常生活を内外から深い不安に投げこもうとしている三つの要素をとらえ、これらを文学等との関係において眺めていくのが、この講演の主旨である。

その一つは1910年代にアメリカに導入されたフロイト精神医学の影響である。フロイト自身はヨーロッパ人でありながら、不思議にも彼の創始した精神医学は、ヨーロッパにおけるよりもより以上の影響力をアメリカに及ぼし、アメリカ人の生活の内面を大きく変えていったのである。それはアメリカ人の科学に対する好みと、アメリカが旧世界ほど古い根強い伝統をもたなかったことに起因するものであろう。ところでフロイトの精神医学はそれ自体、一つの新しい価値観を含んでいる。それは精神の健康の度合いを価値の度合いとする考え方である。くだいて言えば、精神の健康なものが立派で且つ良いものとするのである。彼の心理学はエゴ心理学とも呼ばれるが、その説では、人間の性格を構成するものはイドとスーパーエゴとエゴとである。イドというのはわれわれの本能であり、本能はわれわれが生れた瞬間から、内なる衝動としてわれわれに種々の行為をするように要求する。乳を吸え、食べものを口に入れよ、愛を求めよ、攻撃せよ、とそれはわれわれに要求する。一方、スーパーエゴはわれわれが周囲から学んで、自分のものとした道徳律に従うことをわれわれに要求してくる。汝盗む勿れ、他人の悪口を言うなかれ、義務に忠実なれ、姦淫するなかれ、と。われわれはこの両者の要求に日夜、板ばさみになるが、ここにわれわれの主体性をたもたしめるエゴというものがあって、

この板ばさみを解決してくれる。エゴとはわれわれの内面と外界との間の接触を保ち、一つ一つの場合においてその外的な条件と照し合わせて、ある時はイドの要求の通りに行動し、ある時はイドの要求をおさえて、スーパーエゴの命ずるように行動することをわれわれに命ずるのである。そしてフロイトはこのエゴが強いほど人間は健康であると考えた。ということは、おのずから価値観が彼の説と結びついたのである。もともと健康な身体の持ち主は精神的に見ても立派な人である、というギリシヤ、ローマ時代以来の人間観があった。それがフロイト流にふえんされて、精神医学的に健康なものは即ち立派な人である、ということになった。つまり、エゴの強い人ほど立派な人であることになる。さて、このエゴはわれわれと現実とを結びつけるものであり、現実把握が十分にできるということは、エゴがその機能を十分に発揮している証拠である。言いかえると、現実をよく認識してそれに対処する行動をとって行く人が立派な人、精神の健康な人ということになる。ここにおいて、人生に処するのに、現実に適応するということが一つの理想として示されたわけである。さて、現実とはつかまえどころのない、相対的なものである。しかもこれを基準にして、それからはみ出さない生活をするのが立派なことである、という考えが、人々の心に無言の圧力となってきた。それはまた「平均的人間が健康なのである」という考え方でもある。たしかに精神医学で言えば極端に走らないことが健康である。たとえば、仕事に熱心なのはよいが、それが人生の他のすべてのものに代

って、その人の生活の 100 パーセントを占めるならば、これは不健康である。精神病患者とは「周囲のすべての人とは異った行動をする人間」であり、その住んでいる国のカルチュアと異ったことをする人間をさすのである。ある国では、13、4才でデイトしない女の子は「変りもの」であり、その精神状態がうたがわれるかも知れない。ところが、マホメット教国では13、4才でデイトする女の子は精神病院に入れられるかも知れないのである。つまり、フロイトの精神医学では、健康ということは最も多くの人々が行なうことをもって、その基準とした。だから、健康であるためには一般の人たちと変わらない生活をしなければならない。会社勤めで、課長に昇進するためには妻子をもっていなければならない。適当な家に住んで、週末にはゴルフに行き、ふだんの日には適当に能率をあげて働き、夜は友人の家庭に招かれたり、また友人を招いたりする。ここに「平均的人間」という一つの理想ができ上る。誰もがこれに外れまいとする。その上に「善人は神によみせられて栄える」というキリスト教のアイディアが奇妙な発展をとげ、逆も真なりという論理によって「成功する者は立派なものだ」というアメリカ古来のピューリタンの成功者観ができ上ってくる。従って、「現実を立派に把握した者は成功する」「成功する者はその人自身性格的にも立派なものだ」という風な論法になって、アメリカ人を平均化と成功という理想にかり立てる。現実に適応できない、平均的人生を生きて行けないものはアブレもの (misfit) という汚名をこうむらなければならない。多くのアメリカ人はそのことをよく心得ている。だから、夫妻が二人きりの時は喧嘩ばかりしていても、パーティに出た時は如何にも仲むつまじいように振舞う。

こういう「平均的人間」のグループに属する人々、言いかえれば、「陽の当る側」にいて現実との調和をたもち、周囲の人間の価値観を素直に受け入れて、人生について大した疑問をさしはさまずに安定した生活を享受している人々

の態度は、多くのアメリカ文学に描かれているところである。それが果して真実の価値あるものであるか否かは別としても、このような現実肯定の価値観に立った文学が必ずしも評価の低いものとは考えられない。Initiation Story と呼ばれるものがある。これは若ものが経験を通して現実に目ざめて人生への入門を経験して行くというテーマを扱ったものである。たとえば、マージョリ・ローリングズの『子鹿物語』*Yearling*はその一例である。この少年の物語はあまりにも常識的な人生に満足した態度という点において二流作品であるとしても、もっと高いレベルではヘンリ・ジェームズの小説のように勝れた Initiation Story もある。ヘンリ・ジェームズの大ていの物語は非凡な感受性をもった主人公が、つきつけられた人生の現実になやみながらも、それを通して現実に目ざめて精神的な変化が起り、主人公はそれによって成長していく。

しかし、また、中庸とか、平均的人間とか、現実密着とかは、所詮、相対的な価値にすぎない。それから外れまいと努力して生活することは、敏感な者にはアンニュイを招く。あるものはもっと他の価値があるはずだ、という無意識の探求を志す。たといそれがあつにせよ、自分は他の価値を追求すれば、この「健康な平均」から落伍するのではないかという心のあせりを覚える。ここに、現実に満足しないものとか、或は現実について行けない人が出てくる。それらは平均的人間からあぶれて行くわけである。そしてそこにミスフィットが現われることになる。アメリカ文学は一方において陽のあたる側の正常な、標準的な物語と同時に多くのミスフィットの物語をもっている。最近の例をあげれば、というよりも、最近ミスフィットの物語の方が多い。たとえば、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』*Catcher in the Rye*あるいは『九つの短篇』等がそうであろう。このミスフィットについての作品は「本当はミスフィットの方が正しいのではないか」というテーマを含んでいる。何故なら、人間には何かを——理

想を、たといそれが現実から乗離していても、  
——追い求める欲求があるからである。

次にアメリカ人を不安に投げこもうとする第二の外的な圧迫に移りたい。その主なものはアメリカ社会の目ざましい科学化とでもいうのか、技術革新によってアメリカ社会が産業社会を脱皮して次のポスト・インダストリアル時代に入ったことである。コロンビア大学のダニエル・ベル教授はその著『一般教育の改革』において以下のように論旨を展開する。今日のアメリカでは社会機構とカルチュアというものが一致しなくなった。お互に分裂している。そこで今日のインテリは未来に対して二つの態度をもつ。その二つとは、一つは技術革新を迎え入れて、それに沿った将来を築くことであり、いま一つは、ベル教授のいわゆる「アポクリファ」的態度、すなわち、感性とか、個性とか、自己の恣意を主張する態度である。ところが、この二つは相容れないもので、インテリは二者択一をせまられなければならない。というのは、今日の世界は明らかにプロフェッショナルリズムのテクノクラティック世界であり、技術専制的な時代である。テクノクラティックなこととはイデオロギーを持たないことである。ただ技術の改良を旨とし、如何にして自然を人間に有利なようにコントロールするか、そのためには如何にして人間の知力を動員するか、また、何が人間の理性的な行動であるかということの探求に努力する。それはプロフェッショナルリズムを擁護する。プロフェッショナルリズムとは長年の知識の積み重ねの上に立ってできた技術であって、個人の気まぐれとか個人の意見をさしはさむことを許さない世界である。個人の見解でこれはよいとか悪いとか言えない世界である。新しい時代はこのような技術革命と合理主義というバスに乗り遅れなかった人たちのものであり、それは技術者と経済学者との世界で、一次元の世界である。ダニエル・ベル教授はこのように語るの

である。  
インフォメーション  
事実、今日から明日にかけての世界は情報の世界である。個々人の主観的な人生の解決は

存在しない世界である。ところが、こういった世界はテクノロジーというバスに乗ることのできた強者の世界であり、又、自己の気まぐれとか自己主張を抹殺することのできた者たちの世界である。果してこういうバスに乗ることが、幸福であるか、という疑問も起ることであろう。第一、幸福とは何か、という問題にも発展することなのだが、人間は社会の枠の中では押さえきれない何かをもっている。人間は本質的に、自分の存在を確認したい、という欲求をもっている。自分という人間は未来永劫の中で、一回しか現われなかった生命であり、自己の存在を他の者によって認識されたいという欲求をもっている。この根本的な欲求の現われ方には種々の様相があって、一概には言い難い。「平凡に生きたい」という人が、この欲求をもっていないとも言えない。或はそれは自己の存在を認められているという安心感からして、その人は平凡であることに満足しているのかも知れないからである。ともかく、自分とは何か。自分は何であろうとするのか。この identity の確立、すなわち自己確認なしに安定はなく、人はこれを求めて手さぐりする。すなわち人間を没个性的なものとして一方的に押し流そうとするテクノロジーの世界にあっても、それだけに満足できない人々、自己の個性あるいは主体性を保ちたいとの欲求になやむ人々もあるのである。そこに現代の不安の一つの要素がある。

最後に第三の要素は戦争の恐怖といえよかろう。長期化し、泥沼化したベトナム戦争は直接に生命の危険につながっている。ベトナム戦争にかり出されている多くの青年は前線においてさえ、アメリカの政策に対するレジスタンスを示している。自由の国アメリカというイメージは破れ、個人の意志をうばうアメリカであることを人々は感じている。

以上わたしは現在のアメリカ人を深い不安におとしめようとしている三つの要素をあげたのであるが、そのうち戦争の恐怖を除いて、他の二つ、すなわち、テクノクラシイとか、そのバスに乗れない人たち、また、フロイトの平均

的人間生活のできない人たち、これらの人たちにとっては、この世の中は住みにくいもので、自分は無力であって、自分の意志に関係なく、不条理のことが起って、自分を圧迫するという気持ちにならざるを得ない。

この世の生活というものが本質的には矛盾に充ちたものであり、人間という存在は人智で規定することのできない混沌した、混濁とした性質のものであることは、今日に始ったことではなく、昔から深く考える人々の心には痛感されたところである。17、8世紀の合理主義の時代にこそ、人間は理性的存在であるという安易な考えに人々は安住したのであろうが、それ以外の時代には大文学のテーマは「この混濁たる人間」を如何に考えるか、この混濁たる矛盾に充ちた人間が如何にその制約の下にあがき、努力するかということであった。人間への信頼に充ちたルネサンス時代においてさえも、人間を矛盾にみちた混とんとしたものとしてとらえている。たとえば、シェクスピアはその悲劇の中に多くの矛盾に充ちた人物を主役として登場させ、その人物が落ちこむ時は如何に低くまで落ちこみ、同時にその魂は如何に高く昇り得るかということを示したのであった。『リヤ王』において、われわれは苦しみによる魂の浄化の例をみることができよう。

『リヤ王』にみる如く、理性的といわれる人間そのものも、じつに得体の知れない混とんとした存在であることを知ると同時に、今一つ、この世界の出来事が不条理 (absurdity) きわまるものであることを知るのである。不条理ということは、ある日突然に今までの秩序ある世界がくずれ去り、その人にとって訳の分らない、不利な事態が起ってくることである。何故、どうして起るのか分らない、しかし、それは彼をおびやかすものである。これは古来からあったテーマでもある。すなわち、ヨブの世界は今まで安定していた世界であったが、それが突然、しかも自分がその原因となることなしに崩れ落ちたのであった。ただ先にもふれた合理主義の時代では宇宙は秩序ある存在であるという自信

があった。ロバート・ブラウニングの短詩にうかがえるように「世はなべて事もなし」的的人生観も存在した。しかし深く思考するものにとっては、世の中はそんなに安易なものではない、ということが次第に痛感されてきたのである。いま仮りにフランスに例をとれば第二次大戦を通じ、またそれ以後、この人生の不条理について最も深く真剣にとり組んだのはサルトル Jean-Paul Sartre (1905— ) であり、また少々傾向を異にしたカミュ Albert Camus (1913—60) である。カミュはその有名な『異邦人』の中で次のようにその不条理をのべている。人生は何故不条理かといえ、ある日突然われわれは周囲と断絶してしまう。カミュはその断絶感を次のような比喻でもって描いている。電話ボックスのガラス越しに電話をかけている人を見ると、口の動いているのは見えるが、その人が何を話しているのか皆目わからない。また見なれた木でさえもある日、突然わけの分らないものになってしまう。

また、カミュのエッセーに『シジフォスの神話』というのがある。シジフォスというのはご承知のようにギリシャ神話に出てくる人物である。彼は神に背反した罰として地獄で大きな石を山の上へ押し上げるという仕事を命ぜられる。この石を彼が山の頂きまで押し上げたトタン直ちに石は下に落ちてしまう、するとシジフォスは再びまた額に汗してそれを押し上げにかかる、おそらくこれ程無意味な、不条理な仕事はない。ここで、これらの挿話が教えているものは、この不条理の世の中であって、われわれの唯一つなし得ることは非常の事態にのぞんで、われわれの進退を決定する道徳的勇気をもつことであり、その場、その時にわれわれ自身が直接にかかわって行くことであった。これは同志愛、かかわり合い、共同体意識をもって不条理に処する一つの精神であると示唆している。社会との連関が有限な人間にとって、いかに大切なものであるかが強調されるわけである。アメリカの初期の実存主義的作家たちはこれをもっていた。たとえば、ヘミングウェイの

『持つと持たぬと』の最後に主人公が瀕死の息の下からメッセージとして仲間に残す言葉「一人では何もできない。仲間が集まらなければ。」はこの主張を伝えるものである。

しかしアメリカでは少なくとも文学に現われたところでは、この「ある日突然に起る断絶」にしても「不条理」にしても、ヨーロッパの地盤におけるほどには社会との連関において意識されてはいないようである。もっともリチャード・ライトやジェームズ・ボールドウィン、またルロイ・ジョーンズなどの黒人文学においてはアメリカ社会の矛盾をそのテーマとして前面に押し出しているが、一方、これを個人の内面における断絶として扱ったものは多くの白人の文学に見ることができる。この断絶を扱った文学作品は今日に始ったものではなく、ずっと以前から見られるのであるが、最近作であるソール・ベローの『ハーゾッグ』 *Herzog* に目を向けることにしよう。ハーゾッグは息子までなした妻と離婚するという状態に陥る。妻には愛人があった。しかし彼自身にも女性関係がある。妻との離婚ということは今まで彼の信頼した世界が崩れたことである。妻と子供のいる郊外の小さな家での幸福な家庭生活、よい職、よい社会的地位、彼を支えていたそれらのものが崩れ落ちてしまった。今まで彼は妻とのコミュニケーションがあると信じていたが、今彼は妻とのコミュニケーションを失ってしまい、妻は不可解な存在になる。彼はも早周囲の人とのコミュニケーションをもってはいない。彼は独り山荘にこもって再び他者との人間関係を復活しようとする。そのコミュニケーションの方法は手紙を書くことである。書いた手紙を実際に投函するのではない。彼は有名、無名の人人に架空の手紙を書く。そういうプロセスによって、また、彼はユダヤ人であり、ユダヤ人のもつ強い家族の結びつき（特に彼の兄との）によって、彼は人間関係を復活する。そうこうしているうち、たまたま彼の息子が空家でランチキパーティをして、警察沙汰になったことを機会にして彼と妻とのコミュニケーションは回

復する。

このテーマによってソール・ベローは断絶にたいしていま一つの解答を出したわけである。それは実存主義の出したものと異っている。断絶が起ったときに如何にすればよいか。道徳的勇気でこれに耐えることか？あるいは、その時、その場で同志とともに行動することか？「否」とベローは答える。「周囲の個人との人間関係を対話によって復活せよ」と彼は主張するのである。

このように送るあてもない手紙を書くとか、息子の非行を通して人間関係が復活するというのはケース・スタディ的であり、とりも直さず、フロイトから発達した精神医学の治療的な発想をふまえており、フロイト的解決である。ところで一方、最近に実存主義の「その場<sup>エントル</sup>にある」という主張を一步押しすすめた「その場だけの」consumed on the premises 芸術、ポスト・モダンの芸術が抬頭した。ルールにのった、標準的な正常の範囲の中に住めない、つまり、陽のあたる側から外れたものが現われた、たとえば『ヘア』『おお、カルカット』などはその範ちゆうに属するものであろう。

とりとめもないことを語ってきたようであるが、以下のことを述べて結びとしたい。

いろいろの表現様式——内容そのものが表現ではあるが——が現われてきている。少なくとも従来の伝統によって言語表現を作品として結晶させようとするもの、また、既成のものに対する反抗、いわゆる健康な人たちに対する反抗として、その社会規範に反逆するのみならず言語によるこれまでの表現にも反逆しようとするもの、精神とか人格統一とかを信ぜず、肉体の表現をのみ信ずるものなどである。印刷される、記録されて残る、そのようなものを排除して、その場で消費される芸術——ハプニング、一回かぎりのモダン・ジャズ。それらの多くには「否定のための否定」「破壊のための破壊」をももっていて、必ずしもクリエイティブとは言えない。もっとも彼らにとってはクリエイティブである必要もないのかも知れない。しかし

彼らについて、一つのことは明言できよう。それは彼らの主張したいことは「自分は存在する」ということである。そして、これは又昔からの人間の叫びでもある。このわけの分らない世の中に、秩序にのることのできなかつた、または、秩序にのりたくない人たちの「それでも私は存在する」という叫びである。或は「私は存在を無視されている」という訴えである。例をアメリカ文学以外からとるが、今年度ノーベル文学賞を受けたサミュエル・ベケットの作品は非常に新しい表現方法を使って、絶望的な内容をもった劇であるが、その一つ『ゴドーを待ちながら』と呼ぶ劇では、二人の人物がゴドーという人の現われるのを待っている。一日待った後に少年がやってきて「ゴドーさんは今日は来られないそうです」という。さらに一日待つ。翌日また少年が現われて「ゴドーさんは今日は来られないそうです。明日来るといっておられます」という。そこで彼らは待つことにする。しかし彼らが少年に言う言葉は「ゴドーさんに、私たちを見た、と伝えてくれ」というのである。つまり、少なくとも自分たちは存在したという最少限度の自己主張をしたのである。

また、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』では、世俗的な、常識的な世間におしつぶされそうになりながら、それに反抗している主人公は「ライ麦畑のがけ淵から落ちる赤ん坊たちを自分が一人で受けとめてやる」というイメージを持つ。この救世主的イメージは少なくと

も自分の使命を持とう、生きた目的を持とうという願いである。ドストエーフスキーの『カラマゾフの兄弟』の中に、これと似たイメージがある。放蕩無頼のドミトリは、父親殺しの無実の罪で裁判をうけている時に、夢の中でこのように思っている。「そして彼（ドミトリ）は、自分の質問は不合理でばかげているが、それでも自分はどうしてもあのとおり聞きたかった。そしてああいう風に聞かねばならないような気がした。それから彼は前に一度も経験したことはない、あるいは、憐愍の情が心に起ってきて、泣き出したいような気がした。彼は、餓鬼がもう泣かないように、暗い顔をした干上がった母親たちが泣かないように、みんなのために何かしてやりたい、そしてその瞬間から誰ももう涙を流さないようにしてやりたい、そしてあらゆる障害を排しても、カラマゾフ一流の向こう見ずをもって、今すぐしてやりたい、というような気がした。」

これらは自己の存在の確立、生きがいの確立を表わすもので、この願いは古からの人間の願いでもあった。そして将来とも長く人間の願いでありつづけるであろう。その意味でこの願いは人間における永遠の要素と呼んでもよい。現代のアメリカ文学には、さきに述べたような現実の要素とともに、こうした永遠の要素もまた見られるのである。（昭和45年4月4日アメリカ学会年次大会における会長講演）